

Alter 2

反天皇制運動

号

[通巻 384 号]

2016 年
8 月 9 日発行

第 X 期・反天皇制運動連絡会

天皇制批判には文化的視野も必要だ。その一つは男権主義的文化観の検討だろう。そこで私の愛読書「源氏物語」について以下を。この本は注に頼って文を追うのさえ大変だから実際通読した人はそう多くないだろうが。

この小説を本居宣長の「もののあはれ」(人がものに感ずる情、やむにやまれぬ心をそのままに表わすのをよしとする価値意識)を基準として理解する人が多い。宣長の「ますらをぶり」に対して「たをやめぶり」を高く見る文化観はたしかに一つの見識だろう。しかし私は「源氏」を読んで宣長の考えに首をかしげる点もある。この小説を構成する多くの恋において、男はひたすら「情」をもって女に迫る。それが成就すれば愛人関係・夫婦関係(これを「世」と称する)が成立する。ところがそこに安逸を感じる男に対して、女の方は、この関係の中で自分はいったい何か、に悩み、苦しみ、結局ある意志を持ってそこから脱出するものも多い。「源氏」は別れ話の集合のような感もある。宣長は「もののあはれ」を男女一般について言う。ところが「源氏」では、男はたしかに「直情」に生きるが、女の方には「知」・「意志」・「反省力」が目立つのだ。宣長から見ての「さかしら」だ。

「源氏」が描く男女関係自体はこの時代の普通の姿。しかしこの「世」を、女が心をひかれざるをえないような理想的な男(作者は光源氏をたぶんわざとこう造型した)との関係として設定し、まさにそこに成立する不安・悩み・苦しみをえぐることで、問題の血の出るような切り口を描くことができたのだろう。

だから私は、「源氏」を一個の思想小説、現代のわれわれにも痛切に問題を投げかける思想小説だと思っている。この考えで「源氏」を少人数で読みあうことを余生の一部にしたい、と思うことがある(信天翁)

今月の Alter 天皇主導の X デーがやってきた! — 8・15 反「靖国」行動 — *2
反天ジャーナル — *3

状況批評 ● オバマ広島訪問と伊勢・志摩サミット — 関千枝子 *4
書評 ● ピーブルズ・ブラン研究所パンフレット特別号
『非暴力直接行動への宿題 反戦交友録』 — 有馬保彦 *7

ネットワーク ● 9・4 各エリアにおける監視・抗議行動、報告集会へ — 藤田五郎 *8

太田昌国のみたび夢は夜ひらく (75)
● [Beautiful Japan!!!!] に何の因果関係を見るのか — 太田昌国 *9

マスコミじかけの天皇制 (02) ● 天皇代替り (X デー) の政治が始まった!
— 完成された (違憲天皇制) のヘゲモニーの下に — 天野恵一 *10

反天連声明 — *11 野次馬日誌 — *13 集会の真相 — *16 反天日誌 — *18
会情報 — *18

集



250 円

● 定期購読をお願いします (送料共年間 4000 円)

● 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス

東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス

TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: hanten@ten-no.net

今月の

Alert

天皇主導のXデーがやってきた！ —— 8.15 反「靖国」行動へ！



七月に行われた参院選は、改憲勢力が非改選を含め改憲発議に必要な三分の二を超える議席を獲得する結果で終わった。八月三日には内閣改造と自民党役員人事が行われ、主要な閣僚は大半が留任し、防衛相には稲田朋美を起用した。新聞は「首相が考える安保政策をそのまま自衛隊の活動に反映させていく体制をつくった形」と評し、防衛相経験者による「防衛相の振る舞いを周辺国はよく見ている。有事がエスカレートすることもある」という危惧するコメントを紹介している。

連合国が戦犯らを裁いた東京裁判を不当だと訴え、「伝統と創造の会」を設立し、以来毎年、サンフランシスコ講和条約が発効した四月二八日と八月一日に靖国神社を参拝しているウルトラタカ派である。

女性の防衛相は小池百合子に続く二人目だが、「日本会議」の副会長を務める小池は都知事選で大差で勝利している。その都知事選で、「在特会」の前会長である桜井誠が「選挙の自由」を盾にヘイトそのものの選挙演説を行い、一一万票余の票を獲得した。その結果に正直驚愕したが、安倍や稲田、小池の本音がむき出しの形で表れているのが、桜井と言えるわけで、少なくない数の人々が、彼らをサポートするこの状況だからこそ、私たちは歴史に向き合い、検証していく作業を粘り強く継続する努力がなお一層求められていると改めて強く思う。落胆している暇などないのだ。

参院選の直後に、沖縄高江のヘリパッド建設が本土から五〇〇人という機動隊を動員し

て暴力を伴い強行・再開された。福島原発事故などなかったかのように、川内原発に続き八月に伊方原発の再稼働も行われようとしている。老朽化が進む原発も次々に再稼働へのGOサインを規制委員会が出した。

歴史修正主義者たちが権力の座を占めている。これは本当に恐ろしいことだ。彼らには歴史から学ぼうとする姿勢が全くない。日本の侵略戦争・植民地支配における天皇制の責任も、すべて自分たちに都合のいいように解釈し、まったく同じ過ちを繰り返そうとしている。個人の尊厳など邪魔なだけで駒に過ぎないという「国体護持」の思想が、現在の沖縄の問題や原発の問題に如実に表れている。

今年も8・15に向けて、私たち反天連も参加する実行委は、「聖断神話」と「原爆神話」を撃つ8・15反「靖国行動」を準備し、七月三〇日には日本近現代史研究の千本秀樹さんをお招きし、前段討論集会を行った。（集會報告参照）。

その集会の前の七月一三日、反天連も予想していなかった天皇の「生前退位」の意向が突然NHKから報道された。

私たちはこれを、天皇制が主導する「Xデー状況」と位置づけ、声明をだしたのでご覧いただきたい。【反天連からのよびかけ】01としたのは、今後のあちら側の動きに対して、そのつど声明を出していこうと考えているからだ。

ちょうど一年前の八月一五日の「全国戦没者追悼式」や、その二ヶ月後の「全国豊か

な海づくり大会」でアキヒトは手順を間違った。反天連声明に記したように、年齢のせいだ。「公務」が十分果たせなくなったという思いが今回の「生前退位」の意向表明の背景にある、とマスメディアは一致した報じ方をしている。国民のことを一身に思い、高齢にもかかわらず激務をこなしおかわいそう——という論調である。

「四年後の東京五輪を、新天皇のもとで迎えるべきだともお考えになられ、数年以内の実現を望まれている」と宮内庁関係者の話として週刊誌で紹介されている。オリンピックがヒロノミヤのデビューを飾る場として用意され、「天皇を頂点とする日本国」が世界中にお披露目されるというわけだ。新天皇即位に向けた時間はすでに流れだしているだろう。

発言の違憲性については声明を読んでいたが、あくとして、アキヒトが考える「象徴天皇制」の完成体が天皇主導で行われようとしていることは確かである。八月八日には、天皇自らの「お気持ち」が表明されるという。「天皇条項」「皇室典範」という文字が踊り出している。「民主主義」や「立憲主義」が議論される時、すっぱり抜け落ちていた憲法条文。「大日本帝国憲法」と「日本国憲法」の連続／断絶の関係を問うということがなされなければならない。反撃の時は始まった！

まずは8・15反「靖国」行動にぜひ参加を！

（鰐沢桃子）

天皇の生前退位騒動について

天皇の生前退位問題が話題となっている。論点が多いが、ここでは次の問題提起をしておきたい。

そもそも本日に天皇が「生前退位したい」と言ったのが自体よくわからないのだが、仮に天皇がそのように言ったとして、それを公表してよいのだろうか。憲法上、天皇は「国政に関する権能」（要するに政治権力）を一切剥奪され（憲法四条）、憲法七条に列挙された「国事行為」を「内閣の助言と承認」に基づいて実施することだけが許されている。だが、「自らの退位に関する発言」は憲法七条の一体どこに該当するのか。仮に国事行為に当たるとしても「内閣の助言と承認」は欠けていたはずだ。そうならば、今回は天皇の直接の発言ではないものの、それを他人の口を通じて発表することも許されないはずだ。

本件については様々な憶測が広まっている。だが天皇の意思を忖度（そんたく）し、自らの行動を正当化する者たちによって戦前の政治はメチャクチャにされたのだった。天皇の活動が国事行為に限定された理由が「忖度の政治」の阻止であったことが今思い出されなければならないだろう（もちろん、「自明」のようになっている象徴天皇制それ自体の是非についても議論されるべきである）。

（はじきい）

無情なる選挙

参院選は不毛だった。野党共闘の結果、わが選挙区では自民・民進の事実上の一騎打ち。自民候補は特定秘密保護法推進に力のあった改憲派で、民進候補は地元紙の紙上で「改憲自体には反対ではないが、自民党のやり方は問題だ」と発言。やむなく一人区の投票を棄権した。抗議にだけ意味があった。

そもそもTPP成立が地域崩壊につながる農業県で民進・自民、TPP推進の尖兵の二勢力の拮一を迫る「共闘」とはこれいかに？「大義のために他に手がない」と当地の革新勢力は言つが、大義が改憲阻止ならそこにも繋がってない。自民党改憲案は阻止すべき、TPP阻止も切実なら改憲もTPPも絶対ダメと言えはいいのに。「多数派の支持」なる皮算用を用いる限り人々の生存を求める声は選別され、頭越しの大義が浮く。

同じ流れに昨秋の某野党の党首発言を見る。「国民連合政権ができたなら日米安保廃棄を当面凍結する」。構造的加害者たるヤマトの私たち、日米安保放棄は沖縄とアジアへの加害をやめる重要な選択肢だ。沖縄でヤマトの暴力が働き続ける中、ヤマトの政党が「当面」の間だけでもそれを勝手に棚上げするのは沖縄に「当面」の忍耐を強いること。無意識の植民地主義だろう。無責任すぎなかったか？

（まおう鳥）

ロストックの長い夜

一九九二年夏、統一直後の旧東独の町ロストックで、ネオナチがウエトナム難民を襲った。事件は、ネオナチによる難民襲撃事件のうち最大のもので、統一ドイツの不安定な社会状況を表しているようで衝撃だった。

シリアなど中東からの難民が欧州に押し寄せ、外国人排斥の動きが強まる二〇一四年に事件は映画化された。監督はアフガン難民二世でドイツ生まれのフルハン・クルバニ。

映画は、事件の起きた一九九二年八月二四日を中心に若者、親世代、難民と三者の目から描く。モノクロで始まり、途中から火炎瓶の炎を炙りだすかのようになりカラーになる。

ロストックの難民住宅を日中、ふらつく若者たち。夜になると、警官隊とぶつかり、難民を襲う。その中の一人は、町の政治家の息子。父親は政治にかまけて息子のことは無関心。そして新天地を求めてドイツにやってきたウエトナム難民の女性。夜になり、若者が難民住宅に集まり、野次馬も何千と集まる。若者が火炎瓶を住宅に投げると野次馬は歓声をあげてはやす。火をつけられた住宅のなかで、恐怖に駆られて逃げ惑うウエトナム人。一夜明け、外では子どもたちが後片付けをしている。微笑む女性にペットボトルが投げられる。

ヘイトクライムは世代や国境を超え地球上に広がっている。日本も例外ではない。

（映女）

反

天



ジャーナル

状況批評

思想・状況・批評

オバマ広島訪問と伊勢・志摩サミット

関千枝子（安倍靖国参拝違憲訴訟の会・東京 原告代表）

六月末の日曜日、広島に行く急用ができた。朝の集会で朝一番の列車で行っても間に合わないの、前の晩から泊まろうと宿を探したのだが、満杯だという。広島のホテルは、毎年八月五日は満員状態で大変な騒ぎになるのだが、六月で宿が取れないなど考えられないので驚いたが、「オバマ」効果で大賑わいなのだという。エーッと驚いた。宿の方は広島の方が探してくださって何とかなったが、確かに平和資料館に行っても外国人の客が多く、いつもとは少し違うことを確認した。現職のアメリカ大統領のヒロシマ訪問は初めてのことで、オバマ大統領の来広が核兵器に対する関心呼び起こしているとするれば、それは結構なことではあるのだが、私の胸の内はもやもやしている。

このところ、世界の核を持たない国々は核兵器廃絶に非常に熱心で、核廃絶の条約を作るよう強く求めている。しかし、条約のための協議を始めようという動議も、核を持つ国々によって反対され続けているが、それにいつも「棄権」という態度を続けているのが日本で、「アメリカの核の傘に守られているから」だそうだ。「唯一の被爆国」などと言っている国が、という核を持たない国々からの批判に、岸田外相が言ったのは「ヒロシマ・ナガサキに来てほしい」ということだった。ヒロシマ、ナガサキに来てもらうのは（誰でも）悪いことではないけれど、など思っていたが、G7外相会議が広島で開かれ、核を持つ国、アメリカ、イギリス、フランスの現職外相

が初めて広島を訪れた。私は、オヤと思った。今年日本がG7の開催国になるということはすっかり忘れていた。なるほどそんな仕掛けか。

安倍内閣の外交（岸田外相）、なかなか「巧み」でしかもいやらしいものがあり、気になっていた。たとえば昨年暮れの「日韓合意」である。日本と韓国の間がこれ以上悪くなるのは困るというアメリカの考えが後ろにあるのは間違いないが、岸田外相は「慰安婦問題」について安倍首相に一言「責任」という言葉を言わせただけで、これ以上国際的な場で韓国に物を言わせないことを約束させた。そしてその代価は、韓国が作る当事者の支援組織に日本が金を出すというもので、その代わり、韓国の民間団体が作った「少女像」の撤去を求めるというものである。民間団体が作ったものを政府が撤去を約束できないと韓国政府は言い、岸田外相も「努力目標」という風な言い方だが、自民党内では、少女像について撤去しなければ、金を出さな、といった過激な言葉も飛び交っている。この「合意」について韓国の当事者団体から、こんなものは謝罪でも解決でもない、と厳しい拒否の言葉も出ているが、困ったことにこういう形でことを運ばれると、「当事者の意見を十分に聞かなかった韓国政府が悪い」ということになってしまう。日本の関係団体も、当事者の納得しない解決はおかしいと抗議したが、これではどうしても悪いのは韓国政府で、日本政府はできることをやった、という形になってしまい、

どうにも歯切れが悪い。私はせめて、民間団体の作った「少女像」に日本政府が難癖をつけるのはおかしい、撤去などを言うのは筋違いで、それこそ「盗人、猛々しい」ことだと思い、国会の場で質問し、日本政府の姿勢を正すべきではないかと、間接的に国会議員にお願いしたのだが。そんなやり取りも聞こえてこず、当事者の怒りを抱えたまま、韓国では財団の設立が始まるらしい。どうも何ともいやらしい外交で、「すり替え」というか。これと同じことが、核廃絶外交でも起こりそうで嫌な気分になってきた。

第一、サミットの会場が「伊勢・志摩」なのも気に入らない。伊勢・志摩国立公園というのがあり、今、皆、当たり前のように伊勢と志摩を一緒に言うが、昔、伊勢と志摩は全く違うところだった。伊勢は伊勢神宮の門前町で商業地として栄え伊勢商人と言えば、商売上手で聞こえた存在だった。一方志摩は典型的な農漁村だった。ここが有名になったのは御本幸吉が真珠の養殖を始めてからである。伊勢と志摩が一緒に言われたしたのは国立公園法ができた戦後のことである。

サミットも警備のしやすい「小さな島」がいいというのは道理かもしれないが、それなら「志摩サミット」、または『賢島』サミットでいいというのが私の考えで「伊勢・志摩」とくっつけていうのは魂胆がある。伊勢神宮を宣伝したいのだろうと思っていた。

安倍首相の思考には「新自由主義、アメリカカベったり」にプラスして、戦前の大日本帝国の復活の思いがたぎっている。つまり強い国日本＝天皇制ファシズム、大日本帝国に帰りたいという思いだろうと考える。それは近頃皇室報道がじりじり増えていること「明仁夫妻」のみならず、三笠の一家、秋篠の一家の「大活躍」に表れているが、特にひどかったのは伊勢神宮の遷宮のときの騒ぎだった。テレビなど昼のワイドショーなどで、特番まがいの長時間番組もあ

り驚いた。それを言っても誰もそのおかしさに気づかない。「遷宮は二〇年に一度やるのよ。二〇年前にも遷宮をやっているのだけど、二〇年前、あなたそんな番組やニュースに気がついた？」というと、皆が驚いて「あれ？」という。気が付かないうちに世の中が変わっている。そして、一神社のことが天下の大事件で、これが日本の伝統文化だと、皆が思ってしまった。たった二〇年でこの差。何がこの間起こったのか。

とにかく、「伊勢・志摩サミット」は始まった。始まったところ、沖縄で元海兵隊員による「女性の殺人事件」がおこった。安倍、オバマ対談があつたが、オバマは「遺憾」の意は述べたが地位協定の見直しなど一顧も介さないようであつた。サミットは始まったが、安倍のもくろんだリーマンショック以来の経済の悪化という見解は、ヨーロッパの国々から軽く一蹴されてしまった。

テレビはサミットで大騒ぎで、アナウンサーたちが「イセシマ」を連発するのが気になった、中には「イセシマ」という人もいた。この前安倍首相のテレビ発言を見ていたら、安倍も「イセシマ」と言っていた。冗談じゃないよ。伊勢と志摩は違うんだ、一緒にして！と思っていたが、案の定、G7の首脳たちを伊勢神宮に連れて行った。

日本の人もイセシマで、同じところの神社に行くのだからと妙にも思わない。本当は伊勢と志摩、かなりはなれているのだが、そして、日本の伝統と文化を見てもらったと言っているのだが、あれはどう見ても神事。神道の儀式で、政教分離違反だと思うが。

伊勢神宮は普通の価値の神社ではない。天皇家の宗神で、戦前の国家神道の最上級の神である。安倍はこの神社のことをG7首脳と日本国民に、これこそ日本の文化と伝統と宣伝し、政教分離（憲法二〇条）を実質的に破棄したかったのだろうと思う。

そのあと、オバマ大統領の広島入りである。こともあろうにオバ

マは岩国基地から広島入りした。しかし、オバマは、ヒロシマでは大いに気を使った。自分で折った折り鶴を資料館に捧げ、被爆者たちを抱きしめた。内容はプラハ発言よりも後退していたが、とにかく今の段階で彼の言えること、核廃絶への「夢」を語った。「夢」でなく被爆者は、今すぐの「核兵器の廃絶」への道を願っているのだが。多くのヒバクシャが、オバマ大統領が見せた「優しさ」に感動してしまったことは疑いない。

沖縄に見せた「つれなさ」も皆、すっかり忘れてしまった。沖縄と広島が分断され、沖縄はまた切り捨てられたように私は思った。

伊勢神宮訪問のことは、メディアも問題にもしなかった。日本人の多くが、問題があることに気づかなかった。

だが……。とにかくオバマ＝現職のアメリカの大統領が来たということは、「いけない」とは言えない。「いいこと」である。そして一番得意顔だったのは、「オバマを連れてきた」安倍首相と岸田外相だった。お手柄だ！ みな、国連で核兵器廃絶の交渉を始めることにすら棄権してきた日本の責任など、すっかり忘れてしまった。オバマは、自分の国も含めて核を持つ国に勇気を持てと言った。核を持たず、「唯一の被爆国」でありながら、アメリカの傘の下で、おずおずしている日本にも「勇気を持て」と言っただけだったところだが。

そして安倍は、日米同盟のきずなで戦争を防ぐと大いに謳い上げた。「積極的平和論」だろう。日米の「核抑制」の壁だが。これにも安倍もいいことを言っていると、有頂天になった人がいた。

安倍首相とオバマ大統領が、原爆ドームをバックに一緒に写した写真が、参院選の最中に大いに使われたようだ。オバマ広島訪問は、結局安倍自民党の良き宣伝材料に使われたことは間違いない。

参議院選挙の、野党共闘を評価する人もいる。しかし、自民党が参院でも単独過半数を取り、改憲派が三分の二をこえたことはまち

がない。

秋の国会では、憲法審査会が大車輪で活躍するだろう。一気にやらず、やりやすいところから変えていくだろうという予想もある。そうかもしれない。「やりやすい」ところで、憲法二〇条がまず見直されるのではないかと、私は危惧している。二〇条について、これを単に信教の自由の問題と受け止め、政教分離の意味が分かっている人が多い。ソフトと言われていた自民党の前の改憲草案でも二〇条に、伝統、文化なら構わないと、少し緩やかにする案が入っていた。この程度ならだれも文句は言わない。もう国民は、日本古来の「よき伝統」厳かな神社文化に慣れっこである。気が付かないうちに二〇条が改変するのではないかと私は恐れている。政教分離が「緩やかに」なれば、じりじりと戦前の国家神道の影が入りこんで来る。九条も骨抜きにしてしまったのだから、政教分離の骨抜きなど訳はない。

そして安倍氏はこれを一日も早く、二〇条改悪を望んでいるに違いない。せっかく自衛隊を外に出して、同盟国のために自衛隊員を殺しても、彼らを褒めたたえ祀ってあげるところがなくては、どうにもならない。靖国神社の復権を急がなくてはと思っているだろうから。



ピープルス・プラン研究所パンフレット特別号 vol.1

『非暴力直接行動への宿題——反戦交友録』

有馬保彦（市民の意見30の会・東京）

昨春秋、天野恵一さんから吉川勇一さんが遺した文集を、一周忌を前に出そうと声をかけられ、吉川勇一さんにインタビューした経験のある市民運動の研究者である松井隆志さんを含め三人で編集にとりかかりました。

収めるものは、吉川さんご自身でまとめられた単行本『市民運動の宿題——ベトナム反戦から未来へ』、『民衆を信ぜず、民衆を信じる——「ベ平連」から「市民の意見」へ』には未収録のもの、吉川さんの市民運動に關しての基本的なスタンスや大仰に言えば人間観、人間關係へのスタンスが判る晩年のものを集めることにしました。

したがって、大部分のものは市民の意見30の会・東京の機関誌から、また、インタビュー記事は、手にはいりづらくなった『季刊 運動経験』を収めることにしました。また第二章の初めに読むことができる「80年代安保論争の焦点」は廃刊の『新地平』に掲載されたもの。そして、吉川さんが亡くなられる数日前に書かれた「10・8山崎博昭プロジェクト」賛同の山本義隆さんあての手紙（絶筆と思われる）を収めることができました。

吉川さんが晩年、気持ちをを入れて「市民の意見」（市民の意見30の会・東京）に連載した「反戦交友録」は、吉川さんの、市民運動に関わった人達（思想の違い、運動体の違い）との關係の持ち方が、取り上げられている19名を通してみてことができ、またこれまでの市

民運動の歴史の一端も知ることができます。

天野さんが「刊行にあたって」で書かれています。吉川さんの各文章は市民運動の中で吉川さんが運動の問題点をその時々、論争を呼び起こし、運動の原則を運動内で確かめ合うという作業を行ってきたことが判ります。例えば、ワールドピースナウとの論争（経験の共有・継承には議論が有効、必要である）、共同行動の原則について——「論座」三月号への反響、とくに『労働情報』三月一五日号の座談会について『や、和田春樹さんとの朝鮮戦争と当時の平和運動にたいする論争があります。あるいは、吉川さんのベ平連以来の盟友である鶴見俊輔さんへの批判（石田雄さんの鶴見俊輔批判のコメントも掲載、これは、気持ちいいくらい鶴見俊輔さんの相対主義への批判）。それらは、市民運動の中で、論争することがそれぞれの運動・行動を共に戦うために必要な作業であつたかだと思えます。日高六郎さんはそのような行為を「行動を画一化すること」をさけ、運動を「諸行動の統一」にするために必要だといひます（日高六郎『私の平和論』岩波新書一九九五年）。

これは、パンフレットの題にした「非暴力直接行動への宿題」です。二〇年前のものを『古いもの』と片付けることはできない。最近出された高草木光一さんが編んだ『ベ平連と市民運動の現在』を読んだ市民の意見30の会・東京の会員からはその本の感想が機関誌「市民の意見」（一五七号、八月）に寄せられました。

そのかたは六八年から高校生ベ平連として今も運動を続けている中高年です。その内容は「ベ平連の遺産とはなんだ。今でもジイさんバアさんが現役だ。遺産というなら、自分で考え、自分で行動をすることを学んだことだ」というもの。これを読んだある中高年の会員は、「こういう人は今の統一した運動や若い人たちの運動に水をさすんです、いずれこのような人は勝手なことを言つて運動から消えていく、このような人は運動には邪魔なんですよ」という言葉を投げ捨てた。そう語った人（達）は「ベ平連」のことが運動の中で語られることを拒否しつつ「ベ平連」ということばを都合よく利用しているのかもしれないし、運動の経験のマイナスやプラスを共に検証し共有していくことを拒絶しているのかもしれない。こうした運動・思想のあり方を吉川さんは、一番嫌つていたと思います。このパンフレットの編集を通して、吉川さんが執拗に仕掛けた議論の意味とそのあり方の重要性を私は改めて認識しました。

購入申し込みは下記までお願いいたします。

頒価 一〇〇〇円（送料は、無料）

発行 ピープルス・プラン研究所

〒1120014 東京都文京区関口一四四一三信生堂ビル

TEL 03-6424-5748 FAX 03-6424-5749

Email: ppsg@jcaapc.org

HP: <http://www.peoples-plan.org/jp/>

おっぱい NETWORK

米軍・自衛隊参加の東京都総合防災訓練に反対する実行委員会 9・4各エリアにおける監視・抗議行動、報告集会へ！

藤田五郎（米軍・自衛隊参加の東京都総合防災訓練に反対する荒川・墨田・山谷&足立実行委員会）

今年の東京都総合防災訓練は九月四日、葛飾区水元公園、墨田区スカイツリーを中心に行われる予定だ。米軍・自衛隊参加の東京都総合防災訓練に反対する実行委員会二〇一六は、七月三〇日に前段集会「熊本地震で起きたこと……」（すみだユートリア）を行った。九月四日当日は朝から各エリアでの監視行動、抗議情宣、報告集会（午後二時・青戸地区センターホール）が予定されている。そもそも東京都の防災訓練が問題とされてきたのは二〇〇〇年に当時の都知事・石原慎太郎が、練馬の自衛隊式典において「震災時には」治安出動もあり得る「三

が公然と実施されるなど、自衛隊と教育現場（大学も含む）との結びつきが密接になっている現状がある。とりわけ安保法制成立を経て、九条改憲による国軍化が射程に入つた今、経済的徴兵制の問題も含めて、防災訓練における自衛隊の目標は、単なる防災支援にとどまるものではない。

国人が暴動を起こすかもしれない」という差別暴言を吐き、その年の東京都総合防災訓練を「ビッグ・レスキュー首都を守れ！」と、陸・海・空自衛隊を大々的に展開させたことだ。以降、例年の防災訓練反対闘争は、とりわけ東部圏においては米軍や自衛隊関与への抗議にとどまらず、関東大震災における朝鮮人虐殺の事実を捉え返し、有事体制下の排外主義を問うものとして継続してきた。

7・30集会では、熊本の地で部落解放運動を当該として担い、先の熊本地震では町内の自治会長として救援や避難所の運営にあたり尽力された田中信幸さんが講演。田中さんは、いくつもの困難な事態に直面した体験をふまえ、被災直後からの教訓を語った。部落差別に抗する闘いを通じて、ともに助け合う精神が育まれ、今回の救援・避難所で生かされたことだ。たとえば行政が仕切るだけの避難所に比べて、自治組織が動いて行政に対しても声を出せるところは、食から居住環境、メンタルまであらゆる領域で改善することができた。自衛隊は現地ではそれほど役立っていない、あくまで部分であること。ましてや危険なだけのオスブレイの投入など百害あつて一利なしといった根拠も述べられた。そして見逃してはならないのは、地震翌日からネット上で流された「朝鮮人が井戸に毒を入れた」といった差別煽動のデマ情報である。幸いにも現地では誰も相手にしなかったが、今後起こり得るだろう都市での大地震ではどうなるか。問題は、

結果として何も起きなくてよかったではなくて、そのことが平然と黙認される風潮であると。提起された中身は、防災訓練反対という個別課題で完結する話ではない。広く共有したいところだ。

続いて、「戦争に協力しない！させない！練馬アクション」の池田五律さんが、「こまできている戦争体制」と題して安保法制整備後の自衛隊の変容を報告し、一〇月二三日の自衛隊朝霞観閲式反対行動への参加を訴えた。「高校生をリクルートする自衛隊・自衛隊の手法を取り入れる教育行政」編集委員会の渥美昌純さんは、防災訓練と児童・生徒の関わり方の問題、特に横田の中学で米軍が「ミニ・ブートキャンプ」という軍事訓練を指導したとんでもない実態を報告した。最近では、自衛隊の富士火力大演習の見学希望数も倍増だという。情報誌の「ぴあ」が「自衛隊びあ」を出したり、自衛隊の浸透は凄まじい勢いだ。このことはやがて、経済的徴兵制（軍に入隊することで奨学金返済が免除されるなどの特典）の問題にもつながる。

都知事に小池百合子、防衛相に稲田朋美が決まった。いずれも日本会議と結びついた極右のレイシストである。そして都知事選では「日本で生活保護をもらわなければ死んでしまうという在日がいれば、遠慮なく死になさい」などと東京中にハイトスピーチをまきちらした在特会・桜井誠に「一万四千人余が投票した。相模原事件以降のネット右翼の差別暴言もエスカレートしている。

こうした状況のなかで進行する防災に名を借りた有事体制づくりに異議あり！の声をあげ、反撃の闘いをつくridそう。

二〇一一年以降は、被災地における自衛隊の活躍が盛んにPRされ、炊き出しやトリアージの手伝いとして動員された地域の中高生らが自衛隊と現場と一緒に活動したり、豪華な自衛隊パンフが配られるなど、防災訓練の場が自衛隊にとっての絶好のリクルートPRの場となってきた。さらにはここ数年、都立高校の自衛隊宿泊訓練

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく75

「beautiful Japan!!!!」に、何の因果関係を見るのか



現代世界において、とりわけ、二一世紀に入ってから、世界各地で頻発する「テロリズム」の行動について、私は、それが「反テロ戦争」と因果の關係にあると一貫して主張してきた。二〇〇一年「9・11」の事件が、いかに悲劇的なものであったとしても、攻撃されたのが超大国の経済と軍事を象徴する建造物であったことを思えば、それが強欲な資本主義に対する底知れぬ憎悪を示す行動であったことは、誰の目にも明らかであった。ならば、超大国には、この憎悪が映し出した現代世界の「病」の依つて来る由縁をこそ見つけ出し、それを除去する方策を模索することこそが求められていた。それは、自らが抱える「病根」を抉り出す手術になるはずだった。だが、周知のように、ブッシュ政権下の米国は、その内省の道を選ぶことなく、「反テロ戦争」という報復の道を選んだ。

『カンダハール』などの作品を創ったイランの優れた映画監督、モフセン・マフマルバフの優れたメタファーを借りるなら、貧しさに喘ぐ人びとが住まう土地に超大国が落としたのは、住民が切実に求めているパンや本ではなく、忌み嫌われている爆弾だったのである。それから一五年、アフガニスタンの乾き切った大地の一部は、戦乱の中にあっても止めなかったペシャワール会などが行なう灌漑水路を備えた農業事業で緑の大地と化している。他方、反テロ戦争の標的となった土地では数知れぬ人びとが殺され、爆弾その

他の近代兵器によって大地は荒廃し、住まう条件を奪われた多数の人びとが難民となって異邦の地を流浪することを余儀なくされている。

「反テロ戦争」はアフガニスタンに留まることなく、「世界性」を帯びた。「反テロ戦争」が作り出した諸状況に憤激し、これへの絶望的な反抗を、憎悪に満ちた暴力で発動する「テロリズム」もまた同様に「世界性」を帯びて、今日に至っている。両者の因果の關係を見据えなければ、その双方を止揚する道は見つからないのだ。

因果の關係といえは、ここで、去る七月二六日早晩、相模原で起こった障害者施設襲撃・一九人刺殺事件を取り上げたい。すべての報道に接しているわけではないが（特に、テレビニュースは、その低劣さに辟易しているので、ほとんど見ない）、この事件をこの間の日本の社会・思想状況と重ね合わせて論じる視点が少ないように思える。容疑者が事件に先立つ五ヵ月前に衆院議長（大島理森）に宛てた「障害者を殺害する」とする書簡では、「障害者総勢四七〇人を抹殺する」計画が述べられているが、中段の「革命を行い、全人類のために必要不可欠であるつらい決断」に対する衆院議長の理解を求める文面の次には「ぜひ、安倍晋三様のお耳に伝えていただければと思います」とある。末尾は、「安倍晋三様にご相談いただけることを切に願っております」という文章で締め括られている（「要

旨」しか掲載しなかった新聞では、安倍に言及した箇所は省かれている。省くべき箇所ではないだろう。「異常」にも思える容疑者の心情は、この箇所において、政治の最高責任者という公人への訴えを通して社会性を獲得していると読むべきなのだから。ここでの引用は、七月二七日付東京新聞朝刊による）。

しかも、犯行後現場を離れた容疑者は、五分後にはツイッターに「世界が平和になりますように。beautiful Japan!!!」と書き込んでいると報道されている。安倍晋三には「美しい国へ」と題した本がある（二〇〇六年、文春新書）ことは周知の通りである。容疑者が、安倍に対して大いなる親近感か共感をもっているらしいことをここから推察することは、不当なことではない。首相になって以降の安倍には、政治状況を配慮しながら言葉を「慎む」場合もあるとはいえ、その歴史修正主義者の本質には、いささかの疑念もない。自国が犯した歴史上の過ちと正面から向き合ってそれを克服するのではなく、姑息な方法でごまかしては、自国を「美しい」と言い募るのである。「美しい日本」という言葉の背後には、ナチスの優生学的な民族主義的なスローガンにも似た響きがある。

容疑者の背後にちたつく社会的な影は、ひとり安倍晋三だけではない。石原、猪瀬、舛添、小池を選び続けている都民も、橋下を選んでいた府民・市民も、信じ難いことに実在していることを考えれば、歴史修正主義の考え方および雰囲気、ここまで社会を覆い尽くしてしまったことを認めざるを得ない。恐るべき相模原事件の依つて来る由縁を、容疑者の個人史と資質に還元せずに、この社会を覆う政治思想、すなわち、経済的・身体的・歴史的な強者のためのスローガンが大手を振って罷り通る現実との因果関係で捉えなければならぬ。

（8月3日記）

マスコミの
天^{アキヒト}皇^{ミコ}制^{セイ} 02

天皇代替り（Xデー）の政治が始まった！ ——完成された〈違憲天皇制〉のヘゲモニーの下に



天野恵一

八月六日、広島に原爆（無差別大量殺傷兵器）が投下された日（七十年前）。宮内庁が、天皇が八日午後三時に自分の「お気持ち」なるものを伝えるビデオメッセージをマスメディアに発信するということが、新聞各紙に大きく報道されている。

『東京新聞』にはこうある。

「政府は内閣官房に皇室典範改正準備室を置き、陛下の公務負担軽減策を検討している。当日は、陛下の気持ち表明後、安倍晋三首相がコメントを発表する方向で検討している。政府関係者は『国民の代表として発信することになる』としている。／陛下は「象徴としての地位と活動は一体のもの」という信念を持っており、加齢に伴って活動ができなくなった場合には、退位もやむを得ないとの考えを周囲につたえているとされる」（傍点引用者）

「国体護持（天皇制の延命）に、天皇をトップとする侵略戦争指導者たちが固執したため、アメリカが原爆を完成し使用する時間を与えてしまった。その結果、広島（そして長崎）、さらには大空襲のそして沖縄戦の）大惨劇が現実のものとなってしまった。

数えきれない死傷者を踏み台にして延命した天皇制。象徴へのモデルチェンジをしたその、延命のための新しい方法を、ヒロヒト天皇から代替りした象徴天皇アキヒト（とその一族）が、メッセージを発して提案するという。それが「八月六日」（原爆

の日）に大々的に報じられる。なんと皮肉な話である。

天皇の「生前退位の意向」なるものがマスコミに公表されたのは七月十三日である（NHKのニュース）。新聞各紙は翌十四日、一面をその問題で埋め尽くし、社会面ふくめ、大々的に論じてみせた。この画一的に「陛下の意向」を全面的にクローズアップしてみせる翼賛報道を目にし、私は、これは「天皇代替り（Xデー）政治」のスタートのシグナルであると直感した。この認識を、まず広く共有することとが、運動的にはなによりも大切であり、ヒロヒト天皇代替り（Xデー）の政治プロセスで持った私たちの危機感を、まず想起すべきだと考えた。二代目の象徴天皇の代替りの政治は、一回目の失敗、具体的には「自粛」の連鎖的拡大で多くの自殺者を出し、「平成不況」と言われる事態まで生み出し、大量な天皇賛美画一報道のやりすぎと、天皇主義右翼の暴力の露出が、社会（人々の暮らし）の中に、象徴天皇制の抑圧性を強く広く実感させてしまった。それは、天皇（制）の侵略戦争責任という、長くマスコミではタブーとされている大問題が、全国に生まれた多様な反天皇制運動の中で、広く深く議論される心情的ベースをかたちづくったのである。

この支配者にとってのマイナスの体験は総括され、天皇重体（「自粛」の強制の横並びの拡大）、そして死、さらに新天皇即位儀礼という、ヒロヒト天皇のXデープロセスとは、まったく違ったプロセスが、病床にいるわけではなく、生きている天皇自身によって提案されているのだ。それは、重体（自粛騒ぎの状況下で「過剰な自粛は陛下のお心にそわない」と「自粛の自粛」を呼びかけたアキヒトらしい提案ではないか。

もう一点、このスタートの時点で注目しておくべき問題がある。

宮内庁の山本信一郎次長の「報道されたような事実は一切ない」という十三日夜のコメントである。そんな「お気持ち」は天皇にはない、と明言してみせているのだ。

生前退位の規定は「皇室典範」にはないのだから、それは必然的に「典範」の改正が必要、とすれば、天皇が法律改正を要求していることになってしまふ。象徴天皇はそんな機能はない（非政治）が建前。だから、そう言うしかないのだ。ここにあるのは、非政治のタテマエの下で天皇政治を実現する努力である。

ここには、戦後憲法（象徴天皇規定）の自己矛盾がハッキリと示されている。考えてみれば、代替りして天皇の「公務」を熱心に拡大し続けてきた（アキヒト・ミチコ天皇制）は、「国事行為」以外ではいけないと規定されている憲法を無視して、事実上、「公務」という曖昧な概念にくくって「国事行為」を拡大し続けてきた（違憲天皇制）の完成形態だったのだ。

明文改憲に向かう安倍政権と、解釈改憲を積み上げてきたアキヒト違憲天皇の対立と共存で展開される（天皇代替り（Xデー）政治）と対決する、私たちの反天皇制運動は、スタートしたのである。

【反天連からのよびかけ】01

天皇制が主導する「Xデー状況」への反撃を開始しよう！

——天皇も皇族もやめろ、そして天皇制は廃止せよ！

2016年7月28日
反天皇制運動連絡会

●これは「自粛なきXデー」の始まりである

7月13日、明仁天皇の「Xデー」状況がはじまった。しかもこれまで全く予想されなかったかたちで。

天皇という地位についている人間の生物学的な死としての「Xデー」へのカウントダウンが始まったわけではない。しかし、天皇の「代替わり」にともなう、新たな天皇制像の演出としての「Xデー状況」は、すでに開始されたと見るべきだ。

反天連は昭和天皇「Xデー」との大衆的な闘いに向けて1984年に結成された。昭和天皇の「Xデー」においては、病状報道から天皇の死にいたる時期の「自粛」と「弔意強制」が、列島全体を巻き込んだ社会現象となった。それは経済状況にも影響し、何よりもその「息苦しさ」への反発が、天皇制に対する批判的な感覚を広げた。このことはおそらく、天皇制を演出する側にとっても総括すべき点であったはずである。今回の、いわば「自粛なきXデー」状況の開始は、われわれにとっても、前回とは異なる反天皇制運動の展開を要求している。そのことを見すえながら、私たちは多くの人びととの共同の作業として、開始された「Xデー状況」に反撃する闘いを、さまざまなかたちで準備し開始することと呼びかける。

●天皇が事態を主導している

われわれは、今回のそれがまず、天皇自身による「生前退位」の意向表明として始まったことに注目しなくてはならない。これはたんに年老いた明仁天皇が、現役を退きたいと希望していると

いった話ではない。NHKによってそれが報じられてすぐに、宮内庁幹部や政府は「報じられた事実はない」「承知していない」と打ち消して見せたが、各メディアは事実としてそれを後追いで報じ、宮内庁もまたNHKへの抗議などはしていない。さらに、首相官邸では、限られた人間しか知らず、何を検討しているかについてさえ極秘のチームが、皇室典範改正に関する検討をすでに進めていたとされる。それをも飛び越えて、天皇の「意向」が唐突に明らかになったのは、明仁天皇自身そして徳仁や文仁らの強い意向がそこに働いていたからであると判断される。

今回の件は、明仁天皇自身が、「次代」の新しい天皇制を演出する、その主導的な担い手の一人として立つという明確な意思を表明したということの意味する。摂政をおくのではなく、皇室典範の改正が必要な「生前退位」を、明確に希望したこと、それは象徴天皇制を、明仁天皇みずからが主人公となって、積極的に変革し再構築するという宣言なのである。

●「国民の天皇」の政治的行為

「生前退位意向表明」は、昭和の天皇制とは段階を画した「国民の天皇」としての、明仁天皇制をしめくくるものである。

その即位以来、マスコミ等を通じて演出されてきた明仁天皇制の姿とは、アジアへの外交や沖縄訪問による戦争責任の和解に力を尽くし、国内外の戦跡で死者への祈りを捧げ、さまざまな自然災害の被災者を慰問するなどの「公務」を精力的に行なう、「常に国民とともに」ある明仁と美智子といったイメージであった。しかし、これら一見

すると「非政治的」で平和的な、問題ともならないように見える天皇の行為は、現実にはすぐれて政治的な役割を果し続けている。

たとえば、アジア訪問などにおける天皇の発言は、実質的に天皇制国家の責任も日本軍の責任もなにひとつとらず、ただ口先でだけ「謝罪」のことばを発して終わったことにしようとする日本国家と基本的に同じものである。それがたんなる「口先」ととらえられないのは、「国民統合の象徴」とされる地位に立つ者のことばであり、マスメディアが絶対敬語で無条件に賛美することばであり、ある人たちにとっては侵略戦争の責任者であった昭和天皇の息子のことばであるからだ。国家の儀礼を受け持つのが天皇の役割だが、それは天皇であるからこそ、他の国家機関ではなしえない何ものかを有するものとして演出される。しかし、繰り返すが天皇は国家の機関である。だから天皇のことばを賛美することは、国家のことばを無条件で賛美することと同義である。天皇はそのようなかたちで政治的な役割を果しているのだ。

●天皇の「公務」の拡大は違憲だ

年齢のせいだ「公務」が十分果せなくなったという思いが、今回の「生前退位」の意向表明の背景にある、とマスメディアは報じている。明仁と美智子によってさまざまにおこなわれてきた天皇の「公務」を「誠実」に果していくこと。「生前退位」の意味することは、自らが体現してきたという象徴天皇制のあり方を、その権威も利用しつつ、明仁天皇から徳仁天皇へと意識的につないでいくことに違いない。それは、息子の妻の病いも含め「不安」の中にある次代の天皇制を、ソフトランディングさせていくという意図に貫かれている。

だが、憲法で規定された「国事行為」以外の「公務」なるものは、そもそも違憲の行為である。かつて「統治権の総覧者」であった主権者天皇を、「国民主権」のもとでの象徴天皇に衣替えするにあたって、天皇の役割を法的に限定したのが憲法の天皇条項である。認められた「国事行為」以外に「公的行為」なる区分を立て、天皇の「公務」としてひとくくりにすることは、いわば天皇条項の「解

釈改憲」にほかならない。そうやって勝手に「仕事」を増やしておいて、それを十分に行なえないから「退位」して代替わりが必要だなどと、「政治に関与しない」はずの天皇が言い出すことは、二重に違憲の、ふざけた言い草なのだ。個人的な事情で国家の制度の変更を迫る。ここにあるのは、身体を有する特定家系の個人を国家の「象徴」とする制度自体の矛盾である。

今後、天皇の意思を「忖度」して皇室典範改正作業が本格化されていくであろう。すでに、退位後は「上皇」になるのか、今回限りの特例法で、などといった議論も始まっている。皇室制度を安泰にするための「女性宮家」の検討も再浮上するだろう。右派の抵抗も予想されるが、皇室典範の不合理な部分を、合理化しなければならないといった議論が、「陛下の意思」を背景に、「国民的」になされる場がつくりだされようとしている。

問題なのは、そうした議論の中で、拡大されてきた天皇の「公務」自体の違憲性を、正面から問う言説がほとんど見られないことである。逆にそれを前提とし、それらをより積極的に行なうことが天皇の役割であると言うのである。

私たち反天連の立場からすれば、体制としての戦後民主主義のなかに埋め込まれた象徴天皇制は、民衆の自己決定としての民主主義とは矛盾するシステムである。生まれによって、特別な身分が保障されるような制度はおかしい。私たちは天皇によって「象徴」され統合された「国民」であることを拒否する。膨大な経費と人員を使って、各地に移動するたびに、人権侵害をひきおこし、批判的な少数言論を抑圧する制度は迷惑である。そうであるからこそ、新たな天皇制の再編強化を意味する「生前退位意向表明」に私たちは注目せざるを得ないし、その違憲性を批判し、そこで具体的に生み出される天皇制の政治と言説に批判的に介入していく。

天皇も皇族であることもやめよ。徳仁も即位するな。皇族という存在はいらない。そして天皇制自体は廃止されなければならない。

皇太子妃日記

7月1日～7月31日

〔7月1日〕

「歌会始」◆宮内庁が、翌年1月の歌会始の儀（題は「野」）の選者5人を発表。

安保政策◆安倍晋三首相（自民党総裁）が、共産党が自衛隊は憲法違反で、将来の解散を主張していると重ねて批判。

ヘイトスピーチ◆ヘイトスピーチの抑止策を定めた全国初の大阪市条例が、全面施行される。

〔7月3日〕

徳仁、雅子◆東京都渋谷区の代々木第二体育館を訪れ、リオデジャネイロ五輪日本選手団の結団式に出席。雅子は、シドニー五輪を前にした2000年の結団式以来、16年ぶりの出席となったと報道。

徳仁がいさつで「皆さんのご活躍は、2020年に東京で2度目の開催となるオリンピックの成功につながるものと思います」。

〔7月4日〕

明仁、美智子◆東京・上野の東京国立博物館を訪れ、日韓国交正常化から前年で50周年を迎えたことを記念して開催されている特別展「ほほえみの御仏―二つの半跏思惟像―」を鑑賞。

〔7月5日〕

明仁、美智子◆バン格拉デシユ飲食店襲撃「テロ」で犠牲になった日本人7人の家族について、側近を通じて岸田文雄外相に、「深いお悔やみの気持ち」を伝える。

てほしいという意向を伝達し、負傷した1人の家族にも、「お見舞い」を伝えてほしいとしたと報道。宮内庁によると、側近は「天皇、皇后両陛下には、このたびバン格拉デシユ国の首都ダッカにおいて、国際協力の最前線で尽力されてきた人々が亡くなられ、あるいは負傷されたことに對し、深く心を痛めております。犠牲者のご遺族に対する深いお悔やみの気持ちと、負傷者に対するお見舞いをお伝えするようにとのご意向でした」と述べたという。

〔7月6日〕

明仁、美智子◆東京・渋谷のBunkamuraオーチャードホールを訪れ、小児がんの子どもやその家族らを支援するチャリティコンサート「生きる2016」を鑑賞。

〔7月7日〕

美智子◆東京都港区のサントリーホールを訪れ、日本を代表するバイオリニスト徳永二男の楽壇生活50周年を記念した演奏会「魂の協奏曲」を鑑賞。

徳仁、雅子◆東京都渋谷区の明治神宮会館を訪れ、第52回献血運動推進全国大会に出席。徳仁が「今後、献血を必要とする高齢者が増える予想されることから、若い世代の献血への理解と協力が強く求められています」とあいさつ。献血大会

に先立ち、徳仁が東京都新宿区の東京都赤十字血液センターを訪問。地元の小學生が職業体験をしながら献血事業の大切さを学ぶ「献血セミナー」の様子を視察。研修室で、区立余丁町小6年の児童約30人と面会。

「君が代」◆2020年東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗会長が、リオデジャネイロ五輪日本選手団壮行会（3日）のあいさつで「どうしてみんなそろって国歌を歌わないんでしょうか」などと述べた理由を、主催の日本オリンピック委員会（JOC）が「国歌斉唱」でなく「独唱」の形式で実施したことに疑問を感じたからと説明。

〔7月9日〕

明仁、美智子◆東京都港区のサントリーホールを訪れ、創立60周年を迎えた日本フィルハーモニー交響楽団の記念演奏会を鑑賞。

〔7月11日〕

明仁、美智子◆静養のため、神奈川県葉山町の葉山御用邸に入る。

東宮侍従◆宮内庁が、東宮侍従の松永賢誕が文部科学省へ復帰し、文科省生涯学習政策局男女共同参画学習課家庭教育支援室長の枝慶が東宮侍従に就任する人事を発表。

〔7月12日〕

瑤子◆宮内庁が、故寛仁の次女瑤子が、29日から8月2日の日程で訪米し、第7回国際応用人間工学会議に出席すると発表。同時期に開催される第1回インクルーシブデザイン国際会議にも出席し、い

れも、国際ユニヴァーサルデザイン協議会の総裁として臨むと報道。

久子◆故高円宮の妻久子が29日から8月2日の日程でオランダを訪問し、国際弓道連盟の設立10周年記念行事などに出席すると報道。久子は連盟設立時から名誉総裁を務めている。

〔7月13日〕

明仁◆明仁が、徳仁に皇位を譲る生前退位の意向を示していることが、政府関係者への取材で分かったと報道。取材に応じた宮内庁の山本信一郎次長「そのような事実は一切ない。陛下は制度的なことについては憲法上の立場から話すことを控えてきた。今後も一貫して同じ姿勢」。

風岡典之・長官も否定。／明仁が生前退位の意向を示していることに関し、自民党の佐藤勉・国対委員長が取材に「皇室典範の改正が必要になると思う。党内で議論してもらい、慎重に対応しなければならぬ」。大島理森・衆院議長が取材に「真実を明確に知り得ないので、コメントをする時期ではない」。自民党の小野寺五典・政調会長代理「すごい衝撃だ」。

民進党の松原仁・元国家公安委員長が記者団に「皇室典範を変えなければならぬ議論になってくる」。共産党の小池晃・書記局長が取材に「ご本人の意向が正式に示されたわけではないので、党としてコメントすることは控えたい」。社民党の吉田忠智党首「天皇陛下ご本人の健康が第一だ。円滑な皇位継承をするという点で、ご健在のうちに退位することが望ましい」。皇室典範「改正」について「必要

にに応じて変えていくことには賛成だ」。

皇太子一家◆宮内庁が、皇太子一家が21日に奈良県橿原市を訪問し、初代天皇とされている神武天皇の陵を参拝すると発表。

「7月14日」

明仁、美智子◆静養先の神奈川県葉山町の葉山御用邸を離れ、帰京。

明仁◆明仁が、新たな「公務」の負担軽減策が検討されていた春、身近な関係者に「天皇である以上は公務を全うする。そうでなければ憲法で定められた象徴としてふさわしくない」との趣旨の考えを示していたことが、政府関係者への取材で分かったと報道。明仁は大幅な軽減策を拒み、十分な活動ができなくなれば生前退位も辞さない意向を漏らしたという。

安倍晋三首相「さまざまな報道は承知しているが、事柄の性格上、コメントは差し控えたい」。羽田空港で記者団の質問に答え。／米紙ニューヨーク・タイムズ（電子版）が、明仁が生前退位の意向を示していることについて、生前に退位すれば「光格天皇以来、ほぼ2世紀ぶりの出来事」などと解説しながら報じる。徳仁について「たびたび（日本の）平和主義の憲法を称賛してきた」と述べ、公式には天皇に政治的な権限がないとしながらも、安倍晋三首相が目指す憲法改正とは対照的な考え方を示すかもしれないと主張したと報道。

「皇室典範」◆明仁が徳仁に皇位を譲る生前退位の意向を周囲に示したことから、宮内庁の風岡典之長官ら幹部数人が春以

降、水面下で皇室典範「改正」の是非について本格的に検討していたことが、政府関係者への取材で分かる。議論の進捗状況は官邸と共有し、明仁、美智子に報告されていたといい、宮内庁関係者によると、同庁は近く、明仁に自ら気持ち公表してもらおう方向で検討していると報道。風岡長官が記者会見で、皇室を取り巻く環境の諸課題を話し合うため日常的に幹部が集まることはあると認めたが、

生前退位など「具体的な制度を念頭にやったことではない」と述べる。明仁が生前退位の意向を漏らしたとされることについて「そういう事実はない」と否定した一方で、82歳となった明仁が「いろんなお考えを持たれるのは自然なこと」との見解を述べる。明仁が自ら記者会見などに臨んで「お気持ち」を表明するとの報道は「具体的な予定はない」と打ち消し「憲法上の立場からも、国の制度に関係するような発言をされたことはこれまでもないし、今後もない」。菅義偉・官房長官が記者会見で「私の立場で陛下のお気持ちを申し上げるべきではない」。政府内で生前退位への対応を検討している事実があるのかとの質問に答えずに「皇族の減少にどう対応していくか、皇室典範改正準備室を中心に検討している」と説明したと報道。生前退位に絡み、皇室典範「改正」を検討するかどうかに関して「考えていない」。／民進党の岡田克也代表が記者会見で、明仁が生前退位の際に必要とされる皇室典範の「改正」に前向きな考えを表明。（生前退位の）意向であるなら、

真摯に受け止めてしっかりと対応を考えないといけない。女性皇族が皇族以外の男性と結婚した場合に皇籍を離脱する皇室典範の規定を巡り「皇族の数が一挙に減りかねない。真剣な議論をする必要があるのではないか」と見直しの検討を求め、女性・女系天皇を容認するかどうかは「まだ国民に多様な意見がある」として論点化に否定的な見解を示したと報道。

「7月15日」

明仁◆政府が、明仁が生前退位の意向を示しているとされることについて、早ければ翌年の通常国会で皇室典範「改正」を含めた法整備を行う方向で調整に入ったと報道。12月23日の天皇誕生日をめどに骨子案をまとめたうえで、政府内で

杉田和博・官房副長官をトップとする極秘の担当チームを6月に設置し、検討を始めており、有識者会議も発足させ、意見を聞く方針だと、複数の政府関係者が明らかに。宮内庁側の意向を受け、内閣官房に6月の人事異動で総務省や厚生労働省、警察庁など旧内務省系の課長級約10人が官邸事務方トップの杉田副長官の下に集まり、皇室典範改正の必要性などの議論に着手したという。／明仁が、徳仁に皇位を譲る生前退位の意向を示しているとされることについて、宮内庁が近く、明仁に自ら「お気持ち」を公表してもらおう方向で検討していることが、宮内庁関係者への取材で分かったと報道。政府関係者によると、表現には「退位」という言葉を使わないなど、天皇の政治関与を禁じた憲法に抵触しないよう、宮内

庁を中心に慎重な検討が進められているという。／麻生太郎・副総理兼財務相が閣議後の記者会見で、明仁が生前退位の意向を示しているとされることについて「報道としては承知している」。「ご高齢で（公務の）負担がかかるならば、そういったことを踏まえてどう対応していくかを政府として考えなければならぬ」と述べ、皇室典範の「改正」に前向きな姿勢を示したと報道。

「皇室典範改正」◆菅義偉・官房長官が記者会見で、明仁が示しているとされる生前退位の意向を踏まえた有識者会議の設置について「コメントは控えたい」。政府が「皇室典範改正準備室」を進める皇族の減少に対応するための検討に絡む有識者会議の設置について「現時点では考えていない」。

改憲◆菅義偉・官房長官がBS朝日番組の収録で、憲法「改正」論議の項目を巡り、大規模災害などに備える「緊急事態条項」について「俎上に載せるに値する」。

国立追悼施設◆日本遺族会会長を務めた古賀誠・元自民党幹事長が、共同通信加盟社論説研究会で講演し、靖国神社と別に、新たな国立追悼施設を設置する構想に関し「断固反対だ。魂のない施設をつくっても日本の平和は論じられない。英霊の顕彰にもならない」。

A級戦犯合祀◆日本遺族会会長を務めた古賀誠・元自民党幹事長が、靖国神社に合祀されているA級戦犯の祭神名票（戦没者調査票）を「宮司預かり」の状態に戻すべきだとの考えを示す。

〔7月16日〕

明仁◆明仁が12月の誕生日記者会見で「年齢を重ねる中で、今後どのように象徴としての立場を担っていくのがふさわしいか、思案している」という趣旨の気持ちで、政府関係者への取材で分かる。詳しい内容の検討が始まったばかりの13日に、生前退位について報道が始まったため、宮内庁が前倒しで機会を設け、早期に表明する方向で検討を開始したが、明仁が臨時に気持ちを表明することはあまり例がないため、現在では再び誕生日会見まで慎重に議論する案も含め、日程や内容の調整が続いていると報道。政府は12月をめどに骨子案をまとめ、早ければ翌年の通常国会で皇室典範「改正」を含めた対応を行う方向で調整しているという。

華子◆常陸宮の妻華子が、両側変形性股関節症の治療のため、東京都世田谷区の日産厚生会玉川病院で人工関節置換手術を受ける。

〔7月18日〕

明仁、美智子◆パラオのレメンゲサウ大統領を皇居・御所に招き、昼食を共にして懇談。

〔7月20日〕

美智子◆東京・上野にある国立国会図書館国際子ども図書館を訪れ、現代翻訳児童文学の半世紀を紹介する展示会「現実へのまなざし、夢へのつばさ」を鑑賞。

〔7月21日〕

皇太子一家◆東海道新幹線と近鉄特急を乗り継いで奈良県橿原市を訪れ、初代天

皇とされる神武天皇の陵を参拝。京都市に移り、上京区の京都大宮御所で1泊。

秋篠宮◆静岡県御殿場市で開かれた第50回全日本高校馬術競技大会の開会式に出席し、あいさつ。4月に地震被害を受けた熊本県から参加した4校に対し「余震が続く中、十分な練習ができない状況であつたと推察いたしますが、それにもかかわらず出場を果たされたことを誠に喜ばしく思います」。開幕を控えるリオデジャネイロ五輪・パラリンピックに触れる方が出てきていただくことを願っております。競技を観戦。

五輪教育◆20年東京五輪・パラリンピックに向けた「五輪・パラリンピック教育」のあり方を検討してきたスポーツ庁の有識者会議が、国民にスポーツの価値や意義を浸透させるため、全国の教育委員会が中心となって取り組みを進め、国が財政面を含めて支援すべきだとする最終報告をまとめる。

〔7月22日〕

皇太子一家◆宿泊先だった京都市上京区の京都大宮御所から東海道新幹線で帰京。宮内庁によると、京都御所や仙洞御所を見学。

高江へリパッド◆政府が、沖縄県にある国内最大規模の米軍専用施設「北部訓練場」（東村、国頭村）の部分返還に向け、米側との間で施設内での建設が条件となっているヘリコプター離着陸帯（ヘリパッド）の工事に着手。警察当局が沖縄県外から機動隊員約500人を動員し、

大規模な警備態勢を敷く。

〔7月25日〕

明仁、美智子◆静養のため、東北新幹線で栃木県那須町の那須御用邸へ出掛ける。静養のため、栃木県那須町にある那須御用邸へ入る。

天皇制◆菅義偉・官房長官がBS日テレ番組で、皇族の減少への対応策について「できる限り早く方向性を見いだすことが必要だ」「1年ぐらい前から、勉強会のようなものをしてる」。皇族減少に関する有識者会議を設置する考えはあるかとの質問に「そんな大きなものではない」。「女性宮家」の創設に関し問われ「いろいろなことを議論している段階だ」。高齢となった明仁の「公務」の在り方について「どうするかは大事な問題だ」。明仁の生前退位を巡り、宮内庁が否定していることを踏まえ「それが全てだ」。

〔7月26日〕

明仁、美智子◆栃木県那須塩原市で酪農家の農場を訪れる。

皇太子一家◆東京・六本木の国立新美術館を訪れ、開催中の展覧会「オルセー美術館・オランジュリー美術館所蔵ルノワール展」をそろう鑑賞。

〔7月27日〕

徳仁◆全国高校総体の総合開会式出席などのため、羽田発の民間機で岡山県を訪問。赤磐市で、農林水産業に関わる技術開発を担い、岡山名産の桃やブドウの品種改良、病害虫対策の研究を行っている県農林水産総合センターを視察。明仁の姉で、徳仁の伯母に当たる池田厚子の岡

山市内の自宅を「私的」に訪ねる。／宮内庁が、徳仁が8月11日に長野県松本市の上高地で開催される第1回「山の日」記念全国大会の記念式典に出席と発表。

〔7月28日〕

明仁、美智子◆栃木県那須町の那須御用邸から、東北新幹線で帰京。

徳仁◆岡山市の県体育館「ジッパアリーナ岡山」で全国高校総体の総合開会式に出席し「鍛えた力と技を十分発揮し、友情を育むとともに良い思い出をつくられるよう願っております」とあいさつ。市内のホテルで、大会運営に協力している中国地方5県の高校生らと交流。岡山県総社市の県立大で、自治体やNPOなどが協力して取り組む地域ぐるみの子育て応援事業「県大そうじや子育てカレッジ」を視察。伊原本隆太・県知事が記者会見で、徳仁が開会式で、地震被災地の熊本、大分両県の選手団の行進を見ながら「不自由な中で練習を頑張ってきたのですね」と感想を述べていたと明らかに。

前歴者監視◆自民党の山東昭子・元参院副議長が、相模原の障害者施設殺傷事件に関し、犯罪予告者や性犯罪の前歴者に対応できる法整備を進める必要があるとの認識を示す。「人権という問題を原点から見つめ直す時が来ている。ストーカーもそうだが、人権という美名の下に犯罪が横行している」。

〔7月29日〕

明仁、美智子◆リオデジャネイロ・パラリンピックに派遣される日本代表選手団に金一封を贈る。宮内庁の山本信一郎次

長が、日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会の鳥原光憲会長に伝達。

明仁◆明仁が徳仁に皇位を譲る生前退位を巡り、早ければ8月上旬にも、明仁自身が象徴天皇としての今後の「公務」への向き合い方などについて「お気持ち」を表明する方向で宮内庁が検討を進めていることが、同庁関係者らへの取材で分かる。8日を軸に結めの調整中で、テレビ中継やビデオメッセージで国民に直接語り掛ける方法も浮上しているが、直接的な表現で意向を示した場合、国に制度的な変更を促す内容になりかねず憲法に抵触する可能性があるため、「退位」などの具

美空ひばりの「真相」

第29回政教分離訴訟全国集会

七月五日・六日の両日、東京で「第29回政教分離訴訟全国集会」が開かれた。

毎年、各地持ち回りでおこなわれている交流集会で、今回は「大阪判決を打ち破ろう!」をテーマに、安倍靖国参拝違憲訴訟の会・東京と、ノー!ハプサ訴訟が受け入れ団体となり、初日は全水道会館で六〇人、二日目は御茶ノ水のクリスチャンセンターに三〇人が集まった。

初日はまず、一橋大学の吉田裕さんの記念講演。吉田さんは、安倍の靖国参拝がアメリカからすぐに批判を浴びたよう

体的な文言は使われない見通しと報道。

宮内庁の風岡典之長官が、庁舎内で取材に応じ「そのような日程はまだ決まっていない」。政府は「お気持ち」の公表後に有識者会議の設置の是非も含めた議論を進める方針だが、即座に表立って動けば「天皇による政治関与」との批判を招きかねず、世論の動向を慎重に見極めながら、今後の対応を探る構えという。菅義偉・官房長官が記者会見で「政府として、コメントは差し控えたい」。

徳仁◆岡山県備前市の県備前テニスセンターを訪れ、全国高校総体のソフトテニス競技を観戦。備前市にある国の特別史跡、旧閑谷学校を見学し、岡山空港から

に、日本の歴史認識そのものが国際的に問われた。戦争体験世代の激減とともに、靖国神社を支える財政状況は厳しくなっている。ただし、若い世代の中で、今世紀に入ってから、かつての戦争を「やむを得ない戦争だった」と、消極的に肯定する人が増えていることは見逃すことはできないと指摘。

続いて、大阪と東京の弁護団によるシンポジウムがもたれた。報告者は大阪安倍靖国参拝違憲訴訟弁護団の加島宏さん、同東京訴訟弁護団の淀田利絵さん、ノー!ハプサ第二次訴訟弁護団の浅野史生さん。不当判決に対して控訴した大阪、人証調べの段階に移り、一四名の原告本人尋問が予定される東京訴訟、靖国神社と原告らの父の死との直接的な関係性を具体的に問うている、ノー!ハプサ第二次訴

民間機で帰京。

秋篠宮、眞子◆広島市中区の平和記念公園を訪れ、原爆慰霊碑に献花。松井一実市長から公園などについての説明を受ける。これに先立ち、被爆者が入所する市内の原爆養護ホーム「矢野おりづる園」に立ち寄り、被爆者10人と面会。

瑤子◆故寛仁の次女瑤子が、第7回国際応用人間工学会議に出席するため、成田発の民間機で米国に向け出発。同時期に開催される第1回インクルーシヴデザイン国際会議にも出席する予定で、いずれの総裁として臨むと報道。

久子◆故高円宮の妻久子が、国際弓道連

訟の現段階と問題意識が話された。

二日目は各地からの報告。北海道、大阪、東京（靖国訴訟とノー!ハプサ訴訟）、山口の取り組みと、それぞれの課題について報告された。会場からは松山と沖縄からの参加者の発言もなされた。

二日間の論点は多岐にわたったが、私としては、訴訟をはじめ、粘り強く取り組まれてきた政教分離違反に対する反対運動が、一面では靖国公式参拝路線を挫折させたこと（法廷では「私的」参拝と言わざるを得ない。もちろんそれ自体が欺瞞）、「政教分離」の意味するところは宗教的少数者や非宗教者の信条を抑圧する「おそれ」からの自由の保障であることとあらためて確認できた。天皇制自体の宗教性（非宗教的な儀礼も含めて）を、この問題と重ねて考えることが必要であ

盟の設立10周年記念行事などに出席するため、羽田発の民間機でオランダに出发。久子は連盟設立時から名誉総裁を務めていると報道。

7月30日

秋篠宮、眞子◆広島市の県立総合体育館で開かれた全国高校総合文化祭の総合開会式に出席。

7月31日

美智子◆東京都新宿区の東京オペラシテイコンサートホールを訪れ、聖路加国際大名管理理事長で医師の日野原重明がプロデュースする音楽会「奇跡の歌声に乗せて、愛と生きる力をあなたに」にベー・チェョルコンサートを鑑賞。

ると痛感している。

（北野蒼二反天連）

天皇行事の『海づくり大会』はいらない!海づくりは、海こわし7・18討論集会

天皇制翼賛体制を全国各地に作りだす三大天皇行事の一つ「第36回全国豊かな海づくり大会」や「やまがた」が「森と川から海へ」とつながる「生命のリレー」を大会テーマとして今年九月一日、一日に山形県で開催される。現地で反対闘争が準備されていることから、七月十八日築地社会教育会館で、「8・15反「靖国」行動」主催で五〇人弱が参加して標記集会を開催した。

集会は、天皇アキヒトの「生前退位」

の意向報道→新たな天皇Xデー攻撃への最初の反撃の集会として開始された。

鈴木雄一さん(反戦反天皇制労働者ネットワーク・山形)は、「東北(支配)」と水産業」と題して「東北」、放流行事会場である「鼠ヶ関(ねずがせき)」という地名は、外敵の住む北のほずれを意味する蔑視感があふれている。さらに東北は戊辰戦争で朝廷にさからって以降、仙台におかれた第二師団を中心に経済と行政がつくられてきたなど東北の歴史を語った。今回山形「海づくり大会」の式典会場である酒田市も製鉄業など軍需産業のまちとして形成された。東北は「明治」に二回の天皇行幸が行われたが、その目的は

自由民権運動弾圧と軍隊の慰労が主であり、軍隊を通して天皇制が入って来るというのが東北の歴史であった。そして山形「海づくり大会」は福島原発事故による海洋汚染を隠蔽し、被害者切り捨ての天皇による鎮撫工作である。復興を演出のための、天皇のための行事であると弾劾し、現地闘争への参加を呼びかけた。

天野恵一さん(8・15反「靖国」行動)は、「天皇行事の政治的意図」と題して、今後の天皇儀礼は、全部Xデープロセスで演出される。棄民化政策、被災者の切り捨てを行いながら「震災の復興」を演出する。その総仕上げは、「復興」茶番の東京オリンピックだ。護憲派の総崩れの中で、

「違憲の行為はやめろ」という土俵で共闘する運動をどのように作っていくかが問われていると訴えた。

新たなXデー攻撃の中で「8・15反「靖国」行動」や天皇行事反対闘争の重要性を実感させる集会であった。

(野村II労活評)

8・15実前段集会 「聖断」のウソ―天皇制の戦争責任を撃つ

「聖断神話」と「原爆神話」を撃つ8・15反「靖国」行動は、今年も、七月三〇日の前段討論集会と八月一五日の当日行動の組み合わせとして進められている。

始まったばかりの、天皇自身によって

領導される「天皇制の代替わり」過程のなかにあつて、そして同時に、安倍政権の推し進める「改憲」過程のなかにあつて、日本国家の植民地支配、戦争・戦後責任を、歴史として問い直しながら、現在の私たちを含む社会全体にとつての課題として打ち出していくことは、より重要な意味を持つている。

今回は、講師として、いつも私たちの行動に参加し伴走してくれている千本秀樹さん(日本近現代史研究)に、「『聖断』のウソ―天皇制の戦争責任を問う」と題した問題提起をしていただいた。

反天連学習会

『昭和の終焉 1988-1989 2 天皇と日本人』

(朝日ジャーナル編、朝日新聞社、一九八九年)

前回Xデー期間中の朝日ジャーナル掲載の文章を集めた本である。弓削達雄はローマ皇帝に対する死者裁判と言う制度を通してヒロヒトの戦争責任を問ひ、加納実紀代は大塚英志の「少女たちの「かわいい」天皇」に反論し、河原宏は皇太子アキヒトのイメージ戦略が実は皇太子ヒロヒトに対するイメージ戦略の焼き直しだったことを指摘しつつアキヒトが「福祉的・

楽観的な見通しを語る。他にも、荒俣宏のオカルト天皇論やライシャワの天皇札賛、さらに野村秋介の談話、亀井静香・山花貞夫・上田耕一郎の座談会までと実にバラエティーに富んでいるが、植民地から見た天皇像や代替わり儀式の違憲性を指摘する文章もきちんと入っている。編集部の文章はXデー状況のジャーナリストイックな報告と分析で、当時を振り返るには便利だが詰めは甘い。

が、白眉は中ほどにある、現人神ヒロヒトを記憶している人々による、Xデー直後に発表された文章群だろう。大岡昇平、井上ひさし、野坂昭如、鶴見俊輔、神島二郎、日向康による文章がそれだ。そこにあるのはヒロヒトへの愛憎半ばする思いを抱えた知識人の姿である。愛のほうに勝っているとはまでは言わなくとも、まだまだ充分愛は強いと見える人もいて、今更何を言ってるんだと笑われてしまうかもしれないが、僕は言葉を失った。ヒロヒトへの愛憎入り混じった複雑な感情は、兵士や庶民(嫌な言葉だ)ならともかく、知識人は克服しているものと思ひ込んでいたのだ。この驚きは学生時代「きけ、わだつみのこえ」を読んで、当時の超エリート、知識人予備軍たる大学生たちが内面でどう考えようと兵士として

死んでいった事実への納得出来なさに通じる。いや、もう、なんてことだ。しかし、人はアキヒトに対してヒロヒトのような愛憎は抱かない。護憲天皇として、それこそ知識人から庶民まで濃淡の差はあれ愛を持っているのではないだろうか。アキヒト自身は、天皇は憲法を超越した存在と考えていることが判明した現在(でなきや生前退位なんて本人が大っぴらに言えない)でもこの勘違いは消えない。人々が恨みも憎しみも感じない王を廃するにはどうすればいいのだろうか。天皇自身がXデー開始を宣言しちまったんだが。

*次回は八月三〇日。横田耕一ほか『象徴天皇制の構造』(日本評論社)。

(加藤匡通)

反天皇制

はない！

13時開場／17時デモ出発／ラダ・ポリッ

チ、申恵丰／日本教育会館（地下鉄神

保町駅ほか）／共催：日本軍「慰安

婦」問題解決全国行動・戦時性暴力問

題連絡協議会（連絡先：070-1317-5677

WAM）

8月15日（月）●第43回許すな！靖国国

堂化東京集会

9時30分開場／安海和宣／在日本韓国

YMCAスペースY（JR水道橋駅ほか）

／主催：8・15東京集会実行委員会

●反「靖国」デモ

14時30分集合・16時デモ出発／在日本

韓国YMCA 3F（JR水道橋駅ほか）

／主催：「聖断神話」と「原爆神話」を

撃つ8・15反「靖国」行動（090-3438-0263）

8月21日（日）●お・こ・と・わ・り・東

京オリンピック

13時開場／谷口源太郎・小倉利丸・

鶴飼哲／千駄ヶ谷区民会館（JR原

宿駅ほか）／主催：NO Welcome！

Tokyo Olympic Games 実行委員会

（080-5052-0270 宮崎）

9月5日（月）●安倍靖国参拝違憲訴訟（東

京）第9回口頭弁論

10時集合／東京地方裁判所（地下鉄霞ヶ

関駅ほか）

9月10日（土）・11日（日）●天皇出席の

山形「海づくり大会」反対！現地闘争

10日・15時／酒田市総合文化セン

反天皇制労働者ネットワーク・山形
（080-5090-2451 野村）
9月12日（月）●安倍靖国参拝違憲訴訟（東
京）第10回口頭弁論
10時集合／東京地方裁判所（地下鉄霞ヶ
関駅ほか）
9月13日（火）●沖縄戦首都圏の会総会・
記念講演会
18時15分開場／伊藤千尋／文京区民セ
ンター（地下鉄春日駅ほか）／主催：沖
縄戦首都圏の会（03-3264-2905）
9月16日（金）●連続講座・ドイツの戦
後70年―その現実と歴史認識第3回
「東西冷戦」と「奇跡の経済復興」
18時30分開場／池田浩士／ビープルズ・
プラン研究所（地下鉄江戸川橋駅）／
主催：同研究所（03-6424-5748）
9月17日（土）●地震と原発そして改憲
「国家緊急権」
17時45分開場／山崎久隆、天野恵一／
千駄ヶ谷区民会館（JR原宿駅ほか）
／主催：福島原発事故緊急会議（連絡
先：090-1705-1297）
9月21日（水）●女天研連続講座・ジェ
ンダーと天皇制第4回「女性皇族の公
務―慰問？福祉？」
19時／首藤久美子／文京区民セン
ター13C（地下鉄春日駅ほか）／主催：女
性と天皇制研究会（jotenken@yahoo.
co.jp）

Q……神田川

すでにビールだビールだ中。夏たね。(猥)

なつて、「昭和天皇は平和主義者であつた」という捏造がメディアに広く流通し始めた。それまで主体的・能動的に政治と戦争を指導してきた裕仁は、悲惨なアジア太平洋戦争における日本の敗戦が敵いようもなく明らかな最終期になつて、その側近たちとともに、天皇制を戦後に生きたのびさせるための大掛かりな工作を開始した。それは、連合国なかでもアメリカの戦後構想に、天皇制国家日本をビルトインさせるものだった。その中で、戦争責任はB級戦犯、A級戦犯に案分され、天皇の「聖断」により戦争が終結し「一億総懺悔」という虚構が成立させられた。国家の犯罪を明らかにする多くの事実や資料は隠滅された。戦争責任を一つひとつ具体的に問うことが、戦後における民主主義の出発点になるはずだが、それらの多くは現在に至るまで未決のままだ。

千本さんは、講演の中で、天皇と軍をめぐる歴史事実を細かく俎上にしながら、それがどのように神話化され、書物や映画などにおいて流通しているかを話されていた。こうした事実を踏まえて考えることは、いままさに明仁らが進めている天皇制国家の改造を、思想的、政治的につきつめて捉えていくことにおいて、最も重要なことだ。「平和」を尊称しながら進められる戦争体制と、今後よりいっそう闊つていかねばならない。

集会は文京区民センターで開催、参加者は四十数名だった。

(蝙蝠Ⅱ反天連)

法政情報 INFORMATION

7月15日（金）・7月16日（土）●第29回

全国政教分離訴訟全国集会（集会報告参

照）

7月15日（金）●連続講座・ドイツの戦

後70年―その現実と歴史認識「ニュー

ンベルク裁判と『戦後補償』

7月18日（月）天皇行事の「海づくり大会」

はいらない！海づくりは、海ごわし（集

会報告参照）

7月23日（土）●安倍政権は辺野古新基

地建設を断念しろ！新宿デモ

7月24日（日）／26日（火）伊方原発3

号機動かすな 現地行動

7月30日（土）●「聖断」のウソ―天皇

制の戦争責任を問う（集会報告参照）

7月31日（日）●辺野古新基地建設断念を

求める全国交流集会

8月1日（月）●防衛省行動

8月5日（金）●辺野古・高江の基地建

設強行許すな 沖縄への弾圧やめろ新

宿デモ

8月13日（土）●平和の灯を―ヤスクニ

の闇へキャンドル行動「戦争法の時代

と東アジア」

13時開場／19時デモ出発／高橋哲哉、

韓洪九、新垣毅ほか／在日本韓国YM

CAスペースY（JR水道橋駅ほか）／主

催：同実行委員会（連絡先：03-3355-2841 四谷総合法律事務所）

8月14日（日）●日韓「合意」は解決で